

言葉と知能との関係

フランスの言語・心理学者、ポール・ショシャルの著書に『言語と思考』といふ本がある。それに拠ると、「フランスの学校における黒人の子供の学力や知能は、白人の子供よりも低い、それは生れつきに因るものではなくて、言語の習熟期(三歳～五歳)を、語彙の貧弱なアフリカの社会で過した為である」と述べられてゐる。

ショシャルのこの指摘があるまでは、一般に、漠然と「白人と黒人との間には、知能においても学力においても、明瞭な差があるが、それは生れつきに因るものである」といふ風に考へられてゐたものである。

ところが、ショシャルは、黒人の子供たちの出生地や生育地を一つ一つ調査することにより、「フランスで生れ、フランスで育った黒人の子供は、知能においても学力においても、白人の子供の平均値に少しも劣ってはゐない」と、「白人の子供より劣つてゐる子供は、アフリカで生れ、アフリカで育った子供である」とことなどが突きとめられ、「白人の子供と黒人の子供との知能や学力の差は、生れつきに因るものではなくて、幼児期に習得した言語能力の差に基づくものである」といふことが明らかにされたのである。

知能は幼児期に言葉で作られる

ショシャルの研究は、「人間の知能は生れつきのものではない」と、「知能は言葉によって作られる」と、それも「幼児期に作られるものである」とことなどを証明したものである、といふことが出来る。

言葉の学習では、「三歳から四歳までの一年間」は 成熟期 と名づけられてゐる。それは、この時期に母国語の基礎が概ね完成されるからである。この時期には、他のいかかる時期にも発揚されることのない、不思議に思はれる程に偉大な能力が発揮され、それで母国語に熟達することが出来るのである。

近年、著しい発達を見せた大脳生理学は、知能が幼児期に作られることを一層明確にした。大脳は、肉体の他の部分と同じやうに、二十歳までの間に完全に成熟するのであるが、幼児期に限ってその発達が実に目覚しく、「生後の三年間にその六〇パーセントまでが作られる」といふことが明らかにされてゐる。

昔の人たちは、「三つ子の魂、百までも」と言つてゐて、大脳生理学やショシャルのやうな研究が無かつたけれども、「人間の基礎的な能力は幼児期に作られるものである」とことは、昔の人たちは体験的に知つてゐたのである。